

令和元年度第1回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 令和元年7月4日(木) 午後2時から4時

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会 長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	今井 悦子	新潟市美術協会参事
	大倉 宏	美術評論家
副会長	佐藤 靖子	新潟大学教育学部附属新潟中学校校長
	島 敦彦	金沢 21 世紀美術館館長
	建畠 哲	多摩美術大学学長
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	降旗 千賀子	元目黒区美術館学芸係長
	田宮 佑子	公募委員

(事務局)	前山 裕司	新潟市美術館館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 副参事(学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長(学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館館長
	山口 穰	同 副館長
	奥村 真名美	同 主査(学芸員)

次 第

- 1 部長挨拶 文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新潟市美術館館長 前山 裕司
- 3 議事
 - (1) 新潟市美術館及び新津美術館 平成30年度事業報告
 - (2) その他
- 4 その他
- 5 閉会挨拶 新津美術館館長 横山 秀樹

1 部長挨拶

(中野部長)

東村さんについては、この4月に行われた市議会議員選挙で当選され、本協議会の委員を辞任された。昨日まで市議会が行われており、私も早速、東村さんから質問を受けた。質問は美術館関係ではなくオリンピック絡みの話だった。オリンピックに関して、新潟市はこれまで交流があったフランスとロシアのホストタウンに登録しており、フランスの空手とロシアの新体操を来年の大会の事前合宿で新潟にお招きする予定である。また、オリンピックの方も入場券の抽選結果が発表されたり、聖火ランナーの公募も始まり、だんだん盛り上がってきたと感じている。

新潟市の文化については、今年は新潟港開港150周年ということで、さまざまなイベントを行っている。秋には国民文化祭、障害者芸術文化祭が新潟県で開催され、新潟市も準備に追われている。9月15日から11月30日まで行われるので、ぜひ皆様からも機会があれば、新潟に足をお運びいただきたい。

本日の美術館協議会は昨年度の事業報告を中心に、皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。

2 開会挨拶

(前山館長)

今年は国文祭、障文祭の関係もあり、新潟県内、新潟市内は、県外から多くの方が来場されて賑やかな新潟になると期待している。新潟市美術館の美術館だより『Wave』のなかで障文祭と国文祭の話を書いた。9割の人が国民文化祭を「知らない」という調査があるそうだが、できるだけ賑やかになることを期待している。

平成30年度の事業についてご審議をよろしく願います。

3 議事

(中山会長)

新潟市美術館と新津美術館の平成30年度の事業報告を事務局から説明をお願いします。

事務局から資料1、資料2及びパワーポイントの画像により新潟市美術館の平成30年度の事業報告について説明。

続いて、事務局から資料3、資料4及びパワーポイントの画像により新津美術館の平成30年度の事業報告について説明。

(中山会長)

まず、新津美術館について、意見、質問をいただきたい。

(田宮委員)

先日、「魔法の美術館」の内覧会に参加したが、すごく面白かった。お子さん連れの若いご家族が多かったが、内覧会に招待する人はどんな基準で選ばれているのか。

もう1点、資料4の平成30年度の「構想の理念」の3番で、「他施設との連携や来館者とのコミュニケーションを図り」とあるが、どんな形でコミュニケーションを取っているか。

(横山館長)

「魔法の美術館」では、展覧会が子ども向けということもあり、展覧会を共催する新潟日報社の事業関係の親子連れを招待した。子どもたちの反応も見てみたかったということもある。

それから、来館者とのコミュニケーションについてはいろいろな形があると思うが、一番はアンケートで意見をいただくことである。また、ほとんどのギャラリートークを学芸員が来館者と対話する形で行っている。

他にも、看視や受付の職員にも、コミュニケーションについての研修を行い、来館者の方が気持ちよく過ごしていただけるように配慮している。

(降旗委員)

新津美術館の運営方針がサブカルチャーということで、絵本やアニメの原画などを中心にしながらも、足立美術館のコレクションを借りるなど、展覧会が充実している。一つ提案だが、これは新潟市美術館も同様だが、来館者として展覧会を見て、いろいろ展開して新しいことを始めるという方もいると思う。ボランティアを育てるとか、参加者を育てるということもそうだが、プロ意識を持つ人を育てていく視点がこれから必要なのではないかと思う。板橋区立美術館がこの間リニューアルオープンして、ボローニャの絵本展をやっているが、かなりの年数をやっていて、コンペティションなので作家も育てている。美術館自体が一つの底上げというか、プロの人たちを育てているという意識がすごくある。

目黒区美術館でも建築家による建築のツアーをやっているが、すごく人気があり、その建築家もそれなりに育っており、非常にいい形になってきている。サブカルチャー、新津美術館のよいところを活かしながら、プロ意識の方々を育てていくことが今後できるとよい。

展覧会は安定して、毎年とてもいい企画を緩急をつけて、人もたくさん入る展覧会をやっていて素晴らしいと思う。教育普及と展覧会を含めた形で、何か人を育てるところをお願いしたい。

(横山館長)

地元作家の育成を心がけており、必ず毎年、地元作家の展覧会を入れるようにしていたが、平成 30 年度は巡回展が多くてできなかった。令和元年度は9月に、新潟県の洋画と工芸の現在活躍している作家たちの作品、また、1 月には、新潟に残されている地元作家たちの作品を集めて展示する。そのような形で作家たちの育成を行っている。

(田中委員)

バランスの取れたラインナップだと思う。とりわけ昨年度はターゲットにする来館者が3層、4層と幅が広く、バラエティーに富んでいた。年配の方から家族連れ、そして主婦層という感じでバランスが取れていたと思う。

資料3に「西蒲区の隠れた名品展」の準備とある。昨年度はなかったが、今後、どんなスケジュールで考えているか。

情報発信にも力を入れているとのことだが、SNSの利用状況を教えてほしい。

(横山館長)

展覧会の組み方について、夏には親子連れで来るような展覧会を毎年企画している。昨年度は8区に関連する展覧会はできなかったが、準備期間として、かなり調査した。それを積み上げ、今年の冬に「西蒲区の隠れた名品展」を開催する。

SNSについて、6月分としてフェイスブックが209名、ツイッターが265名という実績である。昨年の6月から1年間でほしい2万件のフォロワー、見てくれた人たちがいるという数字がでている。これからも伸ばしていきたい。

(佐藤委員)

新津美術館で月曜日の「あいてマンデ〜」を開催しているが、行きたいと思ってもなかなかマンデーも行けず、土日でもなかなか行けないことが多い。これは新潟市美術館へもお聞きしたいが、開催する展覧会にもよると思うが、どの時間帯にどのくらいの来館者があるか、年齢層はどうか。来館が少ない時間帯は閉館とは言わないが、例えば開館時間を、夏至なら「夏至で美術」とか「夏至でアート」として夜8時くらいまで開館して、「正午開館～夜8時閉館」とかしてはどうか。東京に行った時など時間があると、森美術館など閉館時間が遅い美術館に行ける。やはり働いている人、年齢層的に20代から40代、50代の人なかなか足が向かないのではないかと思う。私も勤務先が新潟市美術館から車で二、三分のところだが、見逃した展覧会がたくさんあり、残念だったので、新津美術館の「あいてマンデ〜」は非常に注目している。年に何回かでも、開館時間をずらすことも考えてもらいたい。

(横山館長)

「あいてマデ〜」はかなり定着してきて、来館者も多くなっている。資料のとおり、年間で1,235名の利用がある。展覧会により変化はあるが、月曜日をめがけて来る人も多い。

時間帯については、平日はだいたい3時半から4時に人が引きあげ、4時を過ぎると入館する人もほとんどなく、展示室内も非常に観覧者が少なくなる。そのような中で、展覧会を見てから他へ出かけられるよう、開館を朝10時より少し早めることを検討している。後ろに引き延ばすことは、立地条件上なかなか難しいと思う。

年齢層については、展覧会の内容によって年齢層も時間帯も変わるので、一概にどの時間がいいというのはない。子ども向けの展覧会はわりと早い時間が混むし、女性向けの展覧会は、家の朝の仕事が一段落した時間帯に来られるという傾向が見受けられる。

(今井委員)

新津美術館はいつ行ってもたくさんの方が入っていて大変いい環境であると思う。移動美術館は、江南区文化会館の中にある郷土資料館の一室で展示しているが、高齢化社会の中で美術館に行けない方もたくさんいるので、そういう人たちに公開する機会が増えていいと思う。継続してほしい。私も去年と一昨年に行った。去年は展示期間が長くなったが、展示だけで、受付や学芸員がおらず無人ということが少し気になった。1か月開館するなら、説明会や鑑賞会ができないか、より深く展覧会について考える企画がほしいと思う。

(横山館長)

昨年度、今井委員からご意見をいただき、平成30年度は開催期間を1週間延ばした。移動美術館でのギャラリートークについては、できるだけやる方向で検討している。

(大倉委員)

新津美術館は去年は一度も行けず申し訳ない。7万人以上が来館したということで、立地を考えると、たくさんの方に来てもらう展覧会をし、努力して成果があがっている。とても市民の方々から親しまれていると思う。

これは何度も言っているが、個人的に期待することは、私は場所と催しの関係に関心があり、場所を活かすことも美術館の魅力だと思っている。新津美術館は非常にユニークな建物であり、ユニークな環境だと思う。裏庭には円形の舞台があり、入ったところには階段状のエントランスがあり、周辺には池や植物園や遺跡があるので、年に1回でもいいが、そういう場所を活かしてちょっとトガった展覧会をやるととても面白いところだと思う。コレクション展は新潟市美術館に比べて会場も狭いが、展覧会の内容がちょっと平凡な凡庸なテーマが並んでいる。一般の方向けにはいいのだが、コアな人向けにおやつと思わせるコレクショ

ン展、あるいは新潟市美術館の「正・誤・表」のような、学芸員の独自の存在を感じさせてくれる企画が年に一つか二つあると、また違った魅力があり、サブカルチャーに惹かれて集まってくる人たちが、美術の中にある少しトガった表現に触れる時間もあると、新津美術館がさらに魅力的な場所になるのではないかと感じる。

そういう催しだと遠くても足を運ぶのだが、案内状を見ても、どうしても行こうという気持ちになかなかねれず、去年は残念ながら足を運ばなくて申し訳なかった。これはまったく個人的な期待だが、あの場所のユニークさを考えると、そういう企画を年に1回でもやってもらえると嬉しい。

(横山館長)

できるだけ検討します。

(島委員)

移動美術館について、温湿度管理の問題もあるので、開催するのにふさわしい場所は限られているのではないかと思います。例年同じ場所で開催しているのか。

(横山館長)

毎年同じ会場である。温湿度等の問題と、会場に美術館の職員が常駐せず、会場の職員に作品の看視をお願いするので、なかなか市内で開催できる会場がなく、今のところ江南区郷土資料館で行っている。

(建島委員)

規模的、予算的にいろいろな条件がある中で非常に健闘していると思う。入場者数も新潟市美術館を上回る数字で、コレクション展でもこれだけ人が入っている。コレクション展の入場者のほうが企画展より多いが、コレクション展と企画展は数字が連動しているのか。

(横山館長)

連動していない。

(建島委員)

ダブルカウントか。

(横山館長)

ダブルカウントはしていない。企画展は企画展だけでカウントし、コレクション展は無料のため職員を置いていないので、入場者をカウントしている。それを足して出すことはしていない。

(建島委員)

いずれにしても、いい数字が出ている。予算の制約もあるだろうが、もう少し館の独自性を出せる企画展、ここならではの展覧会で、ほかでも巡回できる展覧会があってもいいと思う。実際見ていないので内容の判断はできないが、例えば、新潟市美術館の阿部展也展のような、ここ独自の企画があってもいい。

(横山館長)

当館の予算では、もし「阿部展也展」をやったらそれ1本で終わってしまい、他の展覧会にかけることができない。旅費等も含めても、今のところそこまでの予算的措置がない。

なるべくやりたいとは思っているが、方法論としては、他の美術館と共催で創り上げるやり方かと思う。単独ではなかなか予算措置がなく難しい。

(中山会長)

非常にバランスが良かったと思う。すべて観覧したが、文句のつけどころがなかった。その中でも、リサ・ラーソン展を楽しく観覧した。みんな喜んでいると思う。ただ立地条件が非常に厳しい場所にあり、私も今は運転をやめているので、今後はどうやって行こうかと考えているところだが、アクセスがなんとかなるような方法を検討してはどうか。

(横山館長)

本当に立地条件が悪くなく、バス会社も今年から土日の運行をやめたので、近くにある新津鉄道資料館と費用を出し合い、企画展開催の土日、夏休みや5月の連休に、無料バスを運行し始めた。できれば来年度も引き続きやっていきたいと考えている。

(中山会長)

うまくやってほしいと思う。鉄道資料館や植物園とは、まったく関連性がないが、うまく回っているのか。

(横山館長)

3館でやっている割引券を持ってくる人が増えてきた。鉄道資料館とは距離的な問題があったが、今度、バスの運行ができたので、もう少し連携ができると思っている。

(中山会長)

次は新潟市美術館についてご意見をお願いしたい。

(田宮委員)

コレクション展Ⅲ「美術の偶然！」がすごく印象に残っている。タイトルどおり、作品を選ぶ段階から偶然を利用した展示がすごく面白かったし、展示されていた作品も偶然から生

まれた過程が面白く、一緒に見に来た人と、デカルコマニーの作品を「これはあれに見える」、「これってここの部分だよ」とか話し合いながら鑑賞することができた。私は鑑賞しながら話をするのが苦手だが、この展覧会に関しては、すごく話やすく楽しい鑑賞だった。

その反面、話しながら自分のツバが飛んでしまうのではないかと、気安くなりすぎて体が近づきすぎてしまっているのではないかと、少しハラハラしてしまうときもあり、鑑賞する身として、そういう部分には気をつけていかなければいけないと思った。

企画展はどれもすごく面白かった。目の前にある作品を見るという体験の力強さというか、見応えがすごかった。今は物より体験が大切と言われる時代だと思うので、これからもたくさんの人に鑑賞という体験をしてもらえる展覧会を楽しみにしている。

(前山館長)

実は「偶然」選ばれる作品も、全部が阿部展也の作品にならないようになどの配慮は多少しているが、それでも、ほとんど作為をしないで、いいものが選ばれたと思う。

(降旗委員)

企画展は本当にバランスが取れている。私も阿部展也展を観覧し、非常に研究的な内容で、美術館同士の連携もとてもうまく進んでいて、円熟期の仕事と見受けた。優秀カタログ賞の受賞は本当におめでとうございました。

阿部展也展もそうだが、今回の研究紀要に田畑あきら子さんについて書いてあり、美術館で資料をどのように保管して継続して活用していくかというアーカイブという点でも、新潟市美術館はかなりきちんとやっているのだから、それを展開したというのが非常に興味深い。

コレクション展は一般の方からの評価もすごく高いということで素晴らしい。今、コレクションの充実が各美術館で行われていて、新潟市美術館のコレクション展のテーマはそれを代表しているものだと思う。

一つ提案だが、「正・誤・表」は私は拝見できず残念だったが、こういう面白いテーマのコレクション展は、メイキングのようなものをウェブサイトなどで発信してはどうか。これから美術館も世代交代が進み、新しい学芸員もいろいろ模索をして同じことを繰り返しているのだと、若い人たちを見ていて思うが、そういうところにも非常にいい例として生きていくのではないかと。冊子にするのは手間も大変なので、ウェブサイトで何か発信ができると面白いのではないかと。

私はこの協議会ができてからずっと関わっているが、教育普及について、随分いろいろな形で進化して、円熟期に入っていると思う。今後は、いろいろ展開している中で、一つ少し

年数をかけて育てていくという視点を持って、同じテーマで何かを育てていく、人を育てていく、研究者を育てていく、プロを育てていく。いろいろなやり方があると思うが、それが5年経つとこれが育ってきた、10年経つとそれが育ってきたと言えるような計画を持つのもいいのではないか。

(前山館長)

アーカイブに関しては、個人的にはまだ道半ばだと思っている。「阿部展也」に関しても、写真資料など、これから手をつけなければいけないものがまだまだたくさん残っている。アーカイブは終わりがある仕事ではないので、日常業務の中で怠ることのないように淡々と進めていきたい。

育てることについては、ほかの美術館でも同じようなことが起こっていて、私の前職の埼玉県立近代美術館でも、子ども向けのワークショップを続けていくと同じ人が来るようになってくる。そうなったとき、その人をどう面倒を見ていくのか。そういう人たち向けのワンランク上の新たな展開をいくつかやったが、全体的な流れというのはよく話題に出る。参加した子どもが10年、20年後にどう成長していったのか、どうつながっていったのかということとはなかなか調査できないが、やはり人材を育てることが美術館の一つの目的、使命でもあるので、もちろんプロになる人ばかりではないが、レベルの高い育て方へつなげられるといいと思う。

(田中委員)

阿部展也展の優秀カタログ賞受賞おめでとうございます。企画展はバランスが取れていていいと思う。前々年度の木村希八さんの版画の展覧会の時にも言ったが、コレクションを利用してその魅力を伝える企画展という意味で、この阿部展也展もすごく貴重な意義の大きいものだったと思う。

企画展のラインナップについてはバランスも取れていると思ったが、時期に関して、この4月の展覧会が、新潟市美術館も新津美術館も日本画の展覧会だったのが勿体なかった。相手(作品の借受先など)があるのではなかったとは思いますが、同じ時期に同じような展覧会というのが、もう少し工夫できればよかった。新津美術館の場合、コレクションの内容、数、予算規模の関係で、実験的なことや現代美術はやりにくいと思う。その分、新潟市美術館のほうに現代美術などを期待したい。その辺りも両館のバランスを取った企画を展開してもらいたい。

コレクション展については、私もファンの一人だが、9月の「正・誤・表」を見逃してしまった。楽しみにしていたが、たまたまその時期に新潟にいなかった。こういう実験的なも

のはぜひ続けてもらいたい。

アートリンクの活動は本当に意義があると思う。地方の美術館の数が限られているからこそ、連携が際立ってくる。アートリンクで何か実験的な展覧会ができたなら、面白いのではないかな。地方ならではの連携の活動を全国に発信して、首都圏の真似ではなく、地方だからこそできる、地方の力を見せつけるような意欲的な活動を期待したい。

(前山館長)

新津美術館と当館の企画展が両方とも日本画になったことは残念だった。お客さんを取り合ったのではないかと感じている。展覧会の企画は、巡回展のどこが空いているとか、いろいろな状況の中で決まってくるので、事前協議もしてはいるが、なかなか難しいところがある。両館がうまくいくように気をつけていきたい。

(荒井係長)

小倉遊亀展の担当者として補足をする。ちょうど日本画展が両館で重なるということで、足立美術館の安田鞞彦（小倉遊亀の師）の作品が展示されるのか新津美術館には問い合わせたが出品されなかった。そのような連携が取れたらよかったと担当者として反省している。

近隣の敦井美術館が小倉遊亀の作品を所蔵しており、会期中に展示してもらうなどの連携は図ることができた。時期が重なるならそれを活かす方法はあると思うので、努力していきたい。

アートリンクはまだよちよち歩きで、年に1回、なんとかテーマを見つけてシンポジウムをするのがやっとなので、なかなか全国に発信する力はないかもしれないが、この間も会議の中で、展覧会という形ではなくても、例えば4館で何か鑑賞ツールのようなものを作ってはどうか、そのときに助成金をもらうにはどうしたらいいかという話題は出始めている。いずれは何かを一緒にやることで、4館の力を合わせて一つのことを成し遂げて、皆さんにそれを還元できるようにしていきたい。

(田中委員)

コレクション展は非常に評価されていると思うし、大志を抱いてやってもらいたい。

(建島委員)

コレクション展は本当に頑張っていると思う。「美術の偶然！」や「正・誤・表」は、両方とも見そびれてしまったが、非常に面白く報告を聞いた。

私も前に、コレクション展でユニークなものをやろうといろいろ発想しても、なかなか現実問題としては難しく、皆「同工異曲」になってしまい、いろいろなアーティストを呼んできて選ばせたり、いろいろなことをやったがなかなかうまくいかなかった。軽井沢のセゾン

現代美術館で常設展示を毎回キュレーターがやるのも同じようになってしまうので、何か思い切ったことをやってくれないかということで、先ほどの発想と似ているのだが、ポロックからカンディンスキー、クレー、森村に至るまでの有名な作品を乱数表で番号を打ち、シャッフルして端からめっちゃめちゃに並べたことがある。先ほどもそういう話が出てきたので、似たようなことを考える人がいるのだと思った。「正・誤・表」もコンセプトとしては非常に面白い。収蔵庫に眠っていて一回も見ることがない作品ばかり並べてみたらどうなるかとか、それがかなりスリリングな展示として話題になっているという報告もあり、大変素晴らしい。

企画展は本当にオーソドックスで、シブいと言えばシブい。私が館長を務める埼玉県立近代美術館とは非常に親しい関係があり、阿部展也展は新潟市美術館が提唱して私どもに巡回させていただいたし、今やっている「インポッシブル・アーキテクチャー」は我々のほうが提唱して、こちらに受け入れていただいた。お互いに堅実な美術館としてやっていきたい。

もう一つ、なかなか難しい話でもあるが、前から気になっていることがある。新潟に*No i s m*というダンスカンパニーがあるが、バレエのモーリス・ベジャールに師事して、昨年度、毎日芸術賞を取るなど、日本を代表する、トップと言ってもよいダンスカンパニーである。勅使川原三郎と並んで国際的な評価が非常に高いカンパニーで、しかも地方の「りゅーとぴあ」を拠点に置いているという意味でも素晴らしいことだと思う。金森穰さんは、高知県立美術館に一夏滞在してワークショップをやるなど、美術館との関係に興味のある方だと思う。ただ、美術館はいろいろな体質があり、それをここでやってくれということではないが、時代の流れといってもいいが、映像が展覧会の中に大きく進出してきた、最近のパフォーミング・アーツを展覧会というレベルで評価しようという試みが次々に行われていて、チェルフィッチュの劇団などは美術館などいくつか、平田オリザも美術館の中で上演することを目的とした芝居も作っているし、空間現代という大音響のロックバンドも東近美で演奏したり、いろいろな試行錯誤を行っている。そういうことに積極的に取り組む美術館や、オーソドックスな美術館があって良いが、金森穰の*No i s m*という傑出したバレエカンパニー、パフォーミング・アーツのトップの集団が地方都市にあるという唯一の例かもしれないので、何かそれを活かす方法はないか。*No i s m*も財政的には厳しい状況に置かれており、市としてもそういう余裕はないかもしれないが、一応市が支援しているカンパニーなので、美術館とコラボレーションする関係があってもいいと個人的には思っている。

(前山館長)

また*No i s m*と組めないかという話はたまに出るが、ハードルが高そうだということで終わってしまっている。視野に入れてみる。何かやれることがあればよいと思う。

(荒井係長)

2014年2月に「ニイガタ・クリエーション」という展覧会をしたとき、Noismにも展示参加という形で協力をいただき、かつての舞台公演の舞台装置などで構成したインスタレーションの中で、Noismのメンバーが時を問わずいきなり踊り出すということをした。金森さんからも「また何かやらないか」と言われるが、なかなかタイミングが合わなかったり、予算が無かったりで、それ以降実現できていないので、また機会があったらぜひやりたいと思っている。

(建島委員)

毎年やる必要はないが、何かのタイミングでコラボレーションができるとよい。金森さんお一人でもいいし、ご夫婦でもよい。これは番外編のお願いなので、頭の片隅に置いておいてもらいたい。

(島委員)

昨年度の企画展が全員物故者（作家）だった。阿部展也は特に戦前の作品が発見されるなど、亡くなった作家の重要な検証で、非常に意義のある展覧会だったと思うが、毎年でなくていいから、二、三年に一回くらい、若手作家のグループ展をやってもらいたい。必ずしもお客さんが来るわけではないが、多分、キュレーターは日頃からいろいろな展覧会を見たり、新潟市をベースに活動されている方も結構いると思うので、そういった方々にテーマを設定してグループ展の形で、若手作家たちの発表の場を提供するのが一つの方法だと思う。

最近の若手作家の中には、作品をモノとして作らない人が結構多い。旅費さえあればこちらに来てリサーチをして、映像なり写真なりを作る。それがその人なりの成果として蓄積されて、必ずしもその作品を収蔵しなくてよい場合もあるので、そういう作家たちを含めたグループ展を開催すれば、従来の集荷返却とかを考えなくてもできる。いわゆるリサーチ型のアーティストが随分増えているので、それによって、例えば新潟市を再発見するような、そういう企画を必ずできるのではないかと思う。そういう作家がここで展覧会をやれば必ず遠方からでもわざわざ見に来ることになると思う。巡回展だとわざわざ新潟には来ない。実を言うと金沢21世紀美術館で巡回展を二、三回やったことがあるが、同じだった。金沢でしかやらないようにして、お客さんにわざわざ来てもらうようにしている。少なくとも全国の学芸員が必ず新潟市美術館に年に1回は行かなければいけないという気持ちにさせるような企画をぜひやってもらいたい。前山館長のもとであれば実現できると期待している。

(前山館長)

近くに「ゆいぽーと」という施設ができ、アーティストインレジデンス事業が始まった。

県外、国外の人も来て、滞在し、新潟で取材しながら作品を作っていくというプロジェクトが動き始めたので、そこの連携もこれから広がる可能性もある。

(大倉委員)

去年は新津美術館へ行けなかったが、新潟市美術館の展覧会はだいたい見ている。私は新潟で画廊や砂丘館という施設をやっているが、新潟市美術館の学芸員を含め、来てくださる方が非常に少ない。やはり地域の美術の状況を知るには、館長も学芸員も、もう少し市内の発表を見てもらいたいと前々から思っていた。新潟に住んだり新潟で発表している人たちがどんなことをやっているのかを、この目を見て、それを企画につなげてもらいたいとずっと思っている。

去年の企画は「正・誤・表」以外は全部見た。「正・誤・表」も短い期間だったので本当に残念だったが、学芸員たちの個が感じられる企画が多かったと思う。一般の人たちは、そこで働いている学芸員の個というものをあまり見ていないと思うが、私はそこが新潟市美術館の魅力で、そこが新津美術館との違いだと思うが、その個の良さを感じている人たちは少なからずいると思うので、そこをますます磨いてほしい。

特に最近、コレクション展が面白い。いわゆる値段で言うと全然違う評価の画家たちが一緒に並んだりしていて、それがまた思いがけない作家の思いがけない作品が隣の作品で引き立っているとか、絵をよく見てコレクション展を構成しているところが今の新潟市美術館の大きな魅力だと思う。それを私は高く評価しているし、今後ぜひそれを活かしてもらいたいと思う。

研究紀要に田畑あきら子のことを書いてもらい、私と吉増剛造さんの対談も全部載せてもらったが、やはりこういう研究活動と企画がどこかつながっていくとさらにいいし、阿部展も展はそれがすごく生きたと思う。カタログは、デザインの良さもあったと思うが、これまでの研究の蓄積が評価されたのではないかと思う。こういう企画を今後年に何回か、あるいは何年かに一回でもいいが、ぜひやってもらいたい。

先ほど新津美術館が非常に面白い建築なのにそれが活かされていないということを使ったが、新潟市美術館は前川さんの建築特有の堅さが少しあるので、やはり来る人たちも建物の印象で少し堅いというのがあると思う。先ほどパフォーミング・アーツの話が出たが、その堅さを和らげるいい方法としてパフォーミング・アーツがあると思うし、実は金森さんだけではなくて、新潟には堀川久子さんや、音響では大音量の能勢山陽生さん、それから福島諭さんのような現代音楽の作家もいるし、結構トガった人たちが今、このまちで活動しているので、そういう方々をもう少し活かすことで、この建物の空間の堅さがもう少し和らげられ

るのではないかと思います。今後の企画内容に反映できたらとてもいい。

去年、西大畑旭町文化施設協議会で新潟島の緑を歩く冊子を作ったが、この美術館の裏庭がすごく魅力的なのに、なかなかそこに人が行かないことを残念に思っている。パフォーマンス・アーツなんかを、裏庭とかそういう場所で展開すると建築の面白さもさらに発見できるのではないかと思いますので、期待したい。

(今井委員)

人を育てるという話がでたが、私は新潟市美術協会に属している。新潟市美術館は海に近い環境にあり、貝殻とか木とか自然の漂流物などあると思う。新津美術館も山があり非常に自然豊かな平野もあるので、ぜひ美術館の主催で「人を育てる」という、小さい子どもも大人も一緒だが、そういう参加型の美術を企画して、造型や彫刻、現代美術、写生もあるが、市民の人たちから参加していただくという形もあると思う。

新潟市の財政が厳しいと聞いているが、お金も多少かかると思うが、そういう参加型の美術を展開するというのも一つの手で、これからの時代を生きる人たちにとって、とてもいいことだと思う。

(松沢副参事)

立地条件の特性を活かして、例えば漂着物などを活かしたワークショップなどもというご意見をいただいた。実績としては、だいぶ遡るが 2011 年夏に、絵本作家の田島征三さんを講師に招き、浜辺で拾ったもので作品を作ろうという取組みも行った。野外での活動は、雨天時や熱中症などへの事前対策や、安全面、衛生面での配慮も必要だが、今回のご意見もふまえて、またそのような機会を持てたらと考える。

(今井委員)

相当昔ですね。これからも考えてほしい。

(高橋副館長)

補足すると、今井先生が所属されている新潟市美術協会の先生方のご協力を得て、洋画をはじめ7部門で 11 回の市民向けの講座を、先生方に来ていただいてこの美術館でやっている。この場を借りてお礼を申し上げる。

(佐藤委員)

ナイトミュージアムを年に1回でも、実験的に試行してもらいたい。

教育現場からということで、学校との連携は新潟市美術館も新津美術館もどんどん拡大してもらい大変感謝申し上げます。特に職場体験をこれだけ受け入れてもらうのは大変なことで

あるし、様々な生徒がいると思うが、今後もぜひよろしくお願ひしたい。

ピカソ展を見たが、そのときのコレクション展に吉原悠博さんの作品が展示されていた。私は吉原悠博さんの大ファンで、水と土の芸術祭で 2015 年バージョンを拝見したとき、これは美術作品なのだろうか、このような世の中に問う作品は、社会科等の教員にもぜひ見てもらいたいと思った。事実をずっと追っていく、非常に衝撃的な映像であるし、新潟県が関東圏へ電力を多く供給している、そして山手線の電車は新津で造られているという辺りで、やはりこれは社会的に様々な方々に見ていただきたい作品である。一方で、学校に届く美術関係の文書は、教頭、校長が見て、すぐ美術の教師に渡してしまうことが多いが、幅広くもっと見せたいと思う。当校にも講師が数名いるが、他県の教員採用試験に草間彌生が出題されたが答えられなかったという話があり、やはりいろいろな知識がなければいけないと思う。美術教師だから草間彌生が分かるではなくて、教師は好き嫌いせずいろいろと鑑賞しておいたほうが一般教養が豊富になると言っている。

とことで、先ほど中野部長からの冒頭のあいさつで、国民文化祭やオリンピックの話があった。当校も 11 月 1 日と 11 月 3 日に国民文化祭で和歌をつなげていく「連句」の会場になっており、つい先日から、美術の授業にて連句から連想される風や季節や水を生徒たちが表現して 120 個の和菓子にして、連句会場に展示しようと考え中である。また附属小学校では、ピクトグラムが 1964 年の東京オリンピックと 2020 年の東京オリンピックでどのように変わったかという実践をしている。各美術館の企画展でオリンピックや国民文化祭等の企画展が予定されているか伺いたい。

(前山館長)

県から依頼を受けて、私が障文祭の企画展を監修しているが、まちなかの 2 会場で障害者アートの展示をする計画である。特に美術館で関連企画というのはない。こういう視点はあまりいいとは思わないが、秋にアンドリュー・ワイエスの展覧会をやる。アンドリュー・ワイエスのクリスティーナの世界というのは、まさに足が不自由な女性が主人公として描かれているので、遠いつながりではあるが、関連がなくはないと考えている。

(高橋副館長)

先ほどの開館時間の話について、先回の協議会でも説明させていただいたが、一昨年のデータでは通年で、午後 4 時から 5 時の間の観覧者（企画展）が全体の 5.5 パーセント、5 時から 6 時が 0.9 パーセントとなっている。今年度は、定休日の月曜日が祝日の場合、本来は次の火曜日を閉館にすべきところを特別に開館するというので、年 3 日ほど特別に開館日を増やす試みを行って、夕方が厳しい分、日中に来ていただこうと思っている。

(佐藤委員)

郊外や市外に住んでいる人が、土日にはあまり新潟市美術館に足が向かないが、勤務先が新潟市内だからということで、勤務が終わった6時くらいから観覧できると有り難い。1回だけでもいいので検討してもらいたい。

(高橋副館長)

過去の実績なども踏まえて考えさせていただきたい。

(中山会長)

コレクション展の入館者数はすごく差があるが、そういう予測はどうやっているのか。それから両館で日本画が重なって、私はどちらが多く入るか興味があったが、やはり一般的に言うと足立美術館がネームバリューがあるのかなど。小倉遊亀さんもすごいが、どこから借りたというよりも「絵筆にこめた愛」を頭に出したほうが良かったと思う。

地元なのに阿部展也展がなぜ少ないのか、少し気になった。その辺を考えたらこれからさらによくなっていくのではないかと思う。

(降旗委員)

先ほど現代美術の企画をという話が出たが、前にも何度か現代美術をやっていて、2016年には荒井さんが企画した「アナタにツナガル」という展覧会で、岩井成昭さんや折元立身さんといった作家が確か5人出品し、非常にいい企画で、朝日新聞にも載り、すごく反響があった。石川直樹さんの展覧会も、新潟をテーマにした作品を入れながらやっていた。そういったものを何年かに一回きちんとやっていると理解しているので、また次を期待したい。

5 閉会挨拶

(横山館長)

いろいろな点でご指摘等いただき、これをもとに令和元年度の美術館運営に取り組んでいきたい。皆様方から頂戴したご意見を反映できるよう、両館とも努力を一層続けていきたい。

本日は、お忙しい中、誠にありがとうございました。